

## 【今週の注目疾患】

### 《結核》

2025年は、第4週に県内医療機関から14例の届出があり、累計は45例となった。

2017年以降減少し続けていた届出数は、2024年には824例と増加に転じており、今後の発生動向に注意が必要である。なお、824例の概要は以下のとおり。

性別では男性476例（57.8%）、女性348例（42.2%）と男性が多かった（図1）。年代別では2023年と比較して10代を除く全ての年代で増加しており、特に80歳以上222例（26.9%）、70代145例（17.6%）、50代119例（14.4%）、20代97例（11.8%）が多かった（図2、図3）。病型別では肺結核344例（41.7%）、無症状病原体保有者327例（39.7%）、その他の結核118例（14.3%）、肺結核及びその他の結核33例（4.0%）であった。その他の結核で多かったのは結核性胸膜炎80例、結核性リンパ節炎34例、粟粒結核19例であった（複数症状のあるものはそれぞれに計上している）。

図1：2016年から2025年までの千葉県内結核届出数  
（2025年第4週時点）

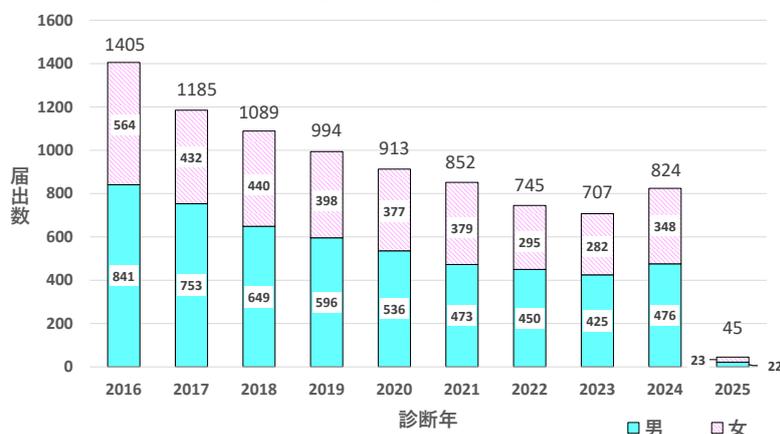


図2：2023年、2024年の年代別結核届出数

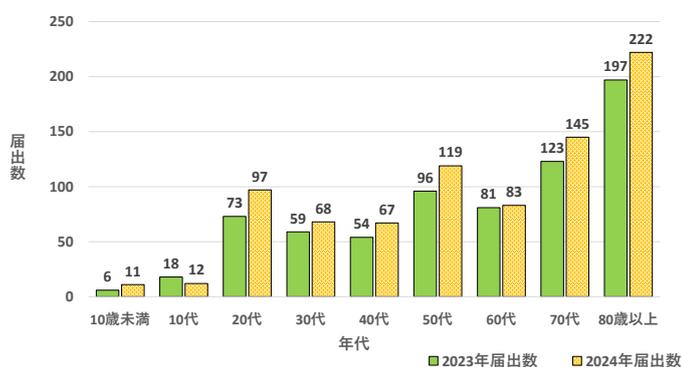
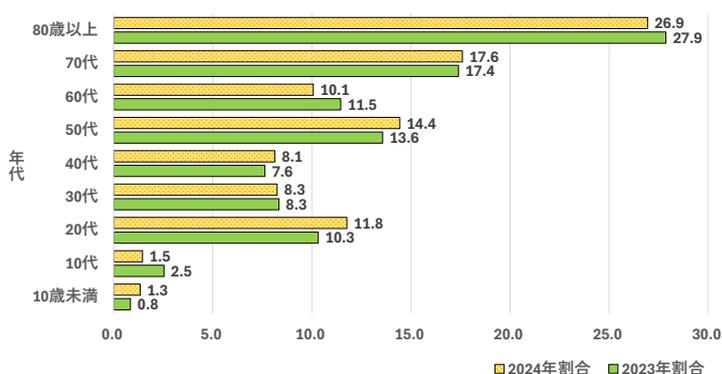


図3：2023年、2024年の年代別届出割合



結核は、結核菌によって発生するわが国の主要な感染症の一つである。初期には風邪のような症状を呈することが多い。痰のからむ咳・微熱・身体のだるさが2週間以上続く場合には、速やかな受診が重要である。また、咳や痰、発熱などの症状が出ないこともあるので、体重減少・食欲がない・寝汗などがある場合にも注意が必要である<sup>1,2)</sup>。

肺結核が代表的であるが、それ以外にも頸部リンパ節、脊椎、腸、腎臓など全身の様々なところに病巣を形成する（肺外結核）。現在でも、結核性髄膜炎は3分の1が死亡し、治っても半数近くは脳に重い後遺症を残すことがある。なお、小児では症状が現れにくく、全身に及ぶ重篤な結核につながりやすいため、注意が必要である<sup>1,3)</sup>。

患者に対する治療は、一定期間毎日複数の薬を服用する。感染しても発症していない無症状病原体保有者（潜在性結核感染症患者）についても、3ヶ月から6ヶ月間薬を服用することで発病を予防する。不適切な服薬の中断は結核菌の薬剤耐性を招き、治療に失敗することがあるため、きちんと服用することが重要である。確実な治療のため、入院中も退院後も医療従事者が服薬を見守る仕組みをDOTSといい、医療機関と保健所が協力して行う<sup>2)</sup>。

#### ■引用・参考

1)厚生労働省：結核（BCG ワクチン）

[https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou\\_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou03/index.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekaku-kansenshou03/index.html)

2)公益財団法人結核予防会結核研究所：結核の常識 2024

[https://jata.or.jp/dl/pdf/common\\_sense/2024.pdf](https://jata.or.jp/dl/pdf/common_sense/2024.pdf)

3)公益財団法人結核予防会結核研究所：結核の基礎知識

[https://jata.or.jp/about\\_basic.php](https://jata.or.jp/about_basic.php)